

## 第1A(中)分科会 教育課程に関する課題

提案主題 「生きる力」を育むための9年間を見通した教育課程の実戦から改善に向けて  
協議の柱 協働の意欲をもってチームとして力を発揮するための教頭の役割

提言者 大分市立賀来小中学校 局 喜美子

### 1 質 疑

- (1) Q 小中一貫教育の生徒指導上のメリットは何か。  
A 小学校低学年の児童の存在を意識して、論ず指導が中心となった。
- (2) Q 教務主任は授業をどのように担当しているか。  
A 音楽科として、5年生から9年生の授業を担当している。
- (3) Q 小中一貫教育のメリットの一つとして中一ギャップの解消があるがどのような状況か。  
A 5年生、6年生は一人の担任が授業を行い、7年生から教科担任制となっている。不登校生が6年生、7年生、9年生にいますが、ギャップを感じてのことではない。

### 2 協 議

- (1) 小中一貫教育のメリットを活かすために、小学校の授業のうまさ、中学校のチーム対応力等を相互に学ぶ姿勢をすべての先生に持ってもらうことが重要である。小中お互いの良さを引き出し、伝え、調整することが教頭の役割である。
- (2) 主要主任の役割分担を明確にし、会議に向けての指示及びアドバイスをを行い、各主任に主体的にやってもらうことが大切である。教頭には調整力が必要で、主任に対して積極的な働きかけをするべきである。
- (3) 教頭には、一人職場の人に力点を置き全体に目を配り、チームとしてまとめていくコミュニケーション能力が必要である。

### 3 指導助言

協働の意欲をもってチームとして力を発揮するための教頭の役割とは、ミドルリーダーに、同僚性を身に付けさせ、それを発揮させることといえる。

同僚性は「職場でお互いに気楽に相談し・相談される、助け・助けられる、励まし・励まされることのできる人間的な関係」、簡単にまとめると「教職員同士のお互いに支えあう良好な人間関係」である。

協働性については「異なる専門分野が共通の目的のために対話し、新たなものを生成するような形で協力して働くこと」言い方を変えれば、「課題解決に向けて集団で取り組み、互いに高め合おうとする関係」と言える。

教員は、互いに学校という同じ職場にいるものとして、課題、悩みや目標を共有し、課題解決に向けて集団で取り組んでいる。それぞれの教員が自分の思いや立場・能力・機会に応じて持ち味を発揮し、実践をしている。その実践に対して、教員が相互にふりかえり改善をしていこうとするならば、学び合いや育て合う関係が深まっていくと考えられる。

教頭は、ミドルリーダーや若手を育てていこうとすることが大切である。